

赤く紅葉した風景



ビクトリアの滝



NPO 法人ザンビアの辺地医療を支援する会

ニュース第 18 号 (H25.11.1)

事務局：宮崎市生目台西 4-7-7 (fax0985-54-5711) 文責：理事長 日高良雄



はじめに 11月となりました。宮崎は晴天が続いて気持ちよい毎日をご過ごせています。今回は、8月にザンビアで実習をされた三重大学医学部の学生さん達の特集号です。学生さん達が感じた素直な思いをお伝えできればと思います。

併せて10月山元先生がルアノに行かれた際の様子もお伝えします。

ルアノ実習での学び (三重大学早期海外体験実習ザンビアコース レポート)

2013年8月28日(水)に、三重大学整形外科 堀和一郎助教と三重大学医学部医学科生6名が、スルさんをはじめとする現地人スタッフの方々には同行させていただき、ルアノ巡回診療を見学させていただきました。とても貴重で刺激的な経験をさせていただき、学生一同、山元先生には本当に感謝しています。現地で直接お会いすることはできませんでしたが、この場をお借りして感謝の気持ちを伝えさせていただきます。各学生それぞれが、巡回診療を見学させていただき、さまざまなことを感じました。個別の感想をいくつか送らせていただきます。



三重大学医学部医学科 2年 竹市憲人

ルアノ巡回がザンビアでの最後の実習となりましたが、それまでの実習は都市部のみで行っていたため、ザンビアの田舎での医療を見れたことはとてもよい経験になりました。医療チームの方や村の人たちは非常に親切にしてくださり、楽しく実習をすることができました。ザンビアの伝統的な家屋や、マラリア検査などを直に見れたのがよかったです。また自動車さえも想像を絶する悪路の中、何時間もかけないと都市部に行けない大変さも実感できてよかったです。

三重大学医学部医学科 3年 中邑信一郎

見学に行く前は非常に簡便な往診というのをイメージしていたが、母子手帳を配布していたり、日本製のディスプレイのついた血圧計を使っている姿が見受けられることが意外であった。母子手帳を忘れた患者さんのためにスタッフが別のノートに記録をつけていて、ぬかりがないように感じた。途中で立ち寄ったチペン

ビヘルスセンターで USAID からのコンドームのダンボールの山積みが印象に残った。国際協力というのは供給する側が需要を見極めて適切に行わないと押しつけになってしまう。まさに、需要と供給がマッチしていない様子を目の当たりにしたように思えた。国際協力の持続可能性の観点からして、物資を現地に供給する、人を派遣する、どちらも不可欠なことだと思うが、ルアノを訪問して、「現地の人と一緒に現地を支援する」ことの大切さに気づかされた。物資の支援は永続的にできるものではないし、人も派遣し続けることはできない。

しかし、現地の人と一緒に支援を行うことは現地の人自身が自分たちの問題を自身で解決することであり、そのプロセスを共に歩み、導くことが何よりの国際協力だと感じた。



三重大学医学部医学科 4年 田島祐

私が夏休みにザンビア共和国での実習に志望したのは、アフリカで行われている医療を自分の目で見て、現地の人に現状を聞き、今の自分に何が足りないのかを感じるためだった。私たちがルアノ地区を訪問させて頂いたのは実習の終盤だった。電気も水道もなく屋根に糞を敷き詰めた建物で行われる診療はさながら『青空診療所』とも例えられるものだった。そのようなところで医療活動に従事される山元先生が現地の人たちにとってどんなに心強い存在であるかは言葉に表現するまでもないと感じた。私は自分にできることなどないはずなのに、マラリア検査をされるヘルスワーカーの方の補助をさせて頂いたりして、何かできることはないかと探した。何が自分をそこまで突き動かしているのか、その時は考える間もなかったが、ルアノを離れる際にそのヘルスワーカーの方に「将来絶対にルアノに医師として戻ってきてほしい」と言われ気が付いた。何もできない自分でも少なからず必要とされているという責任感ではないかと思った。



現地の人たちは優しい。ニャンジャ語の話せない私たちを手厚く歓迎していただいた。そして毎日どのように生活しているのかを輝く目を大きく見開いて教えていただいた。まったくそのようなつもりはなかったが、このような人たちに嘘はつけないと感じた。だからこそ、また近いうちにザンビアに戻り、今度は山元先生のいらっしゃる時にルアノを訪問させていただきたいと考えている。将来医師を生業にする限り、周りから必要とされるような存在でありたいと強く自覚したルアノでの実習は、私の今後を大きく方向付けたと思っている。



現地の人たちは優しい。ニャンジャ語の話せない私たちを手厚く歓迎していただいた。そして毎日どのように生活しているのかを輝く目を大きく見開いて教えていただいた。まったくそのようなつもりはなかったが、このような人たちに嘘はつけないと感じた。だからこそ、また近いうちにザンビアに戻り、今度は山元先生のいらっしゃる時にルアノを訪問させていただきたいと考えている。将来医師を生業にする限り、周りから必要とされるような存在でありたいと強く自覚したルアノでの実習は、私の今後を大きく方向付けたと思っている。

三重大学医学部医学科 4年 伊野綾香

今回、ルアノ巡回診療に同行するという貴重な機会をいただきありがとうございました。私達の実習はザンビアにおいて10日間ほどのものでしたが、それまでに見学した UTH やチンゴラでの産業病院は、もちろん日本などの先進国の医療水準と大きくかけ離れてはいましたが、それでもかなりの規模と施設が整えられていました。それを見た後だったこともあり、本当に“よくイメージするようなアフリカ”といった感じのルアノ地区の訪問で、簡単な体重・血圧測定やマラリアの簡易検査しか行えない診療をルサカでのそれと比較

するとかなりの医療格差があるのを実感しました。今、日本でも都心とへき地等を比べて受けられる医療に格差があることが問題視されていますが、そういったことは何も日本に限ったことではなく、どこでも起こり得ることなのだと強く感じました。同時に、普段医療をなかなか受けることのできない人達が、長い時間をかけて村々から集まり、どれほどこの巡回診療を頼りにしているかということもひしひしと伝わってきました。

私がルアノ巡回でもう一つ強く感じたことは、言葉が通じるといふことの重要性です。ザンビアは公用語が英語ということもあり、首都ルサカをはじめとした大都市ではごく普通に意思疎通を図ることができました。しかしルアノ地区ではニャンジャ語やトンガ語しか話せない方が多く、到着後すぐはあいさつの仕方も分からない状態だったため、集まった人々からかなり警戒されているように感じました。しかしその後、英語と現地語両方を話せる方から、簡単な単語を教え



ていただき話してみると、一気に親しみやすい雰囲気になったのを今でもよく覚えています。これから先、実際にどこで働くか等ははまだ分かりませんが、どこへ行ったとしても医学と併せて語学の勉強も努力を惜しまず、より良いコミュニケーションをとれるよう心掛けたいと思います。

知識も技術もない状態にもかかわらず、今回巡回への同行をできるようはからってください本当にありがとうございました。今はもうザンビアにいらっしゃるということですが、お身体ご自愛ください。またいつか先生にお会いすることができればと思います。

三重大学医学部医学科4年 奥村陽介

私は今回の見学を経て、無医村への巡回診療とは、住民が無医村にこれまでなかった「医療」という考え方をいかに理解し導入するか、また支援側が住民をいかに援助していくか、に対する挑戦だと感じました。それは、無医村に新しい医療（検査キットや薬剤）を導入することは、住民自身が対象の病気に対して、予防や検査、治療ができるという考え方を持つことからスタートすると感じ、巡回診療とは壮大でまた難しい事業だと思ったからです。住民の健康への思いや、医療への期待が大きくならなければ、医療の導入はなかなか受け入れられないのではないかと感じました。無医村の医療水準の向上に最も寄与するものは、教育や経済の水準の向上ではなく、実際に医療を受けどんな効果が得られてきたかという経験値なのかもしれないと思いました。

また、先進医療が無医村にすぐには持ち込めない理由のひとつがここにあるのではないかと考えました。すべての病人に、先進医療が施される訳ではないということを学びました。また、先進医療が全てのひとにとってよい医療となるわけではないことも、逆説的に感じ得た気がします。

無医村への巡回診療は今後も長く継続していただきたいなど率直に感じております。今後も山元先生のご健康とご活躍をお祈りいたします。本当にありがとうございました。



現地活動報告 (山元先生より 10月9日ルアノ地区での巡回診療の報告)

10月9日ルアノに巡回診療に出かけました。久しぶりの診療でしたので、また、時差ボケもあり前の晩は良く眠れませんでした。

乾期が続いていますので、道路は乾燥し、前方に車が走っているとほこりが立って、全く前が見えません。車の窓を閉めていても、ほこりが入り、着ているもの、私は腰が悪いのでコルセットを着用しているのですが、そのコルセットまでうす茶色によごれてしまいました。途中の山々の木々が茶色や黄色に色づき始めていました。

久しぶりのルアノ地区でしたが、何も変わっていません。集まっている患者さんはあまり多くないようです。診察室にコンテナを運び入ると、2人の子供が地面に横たわっています。熱もあるようです。すぐにマチラさんにマラリア検査をお願いすると、2人とも陽性でした。この2人も含めて、マラリア患者は合計8人で、マラリア検査の陽性率も25%と高くありませんでした。かぜや結膜炎の患者が多かったです。全体の患者数も73人と少なく、早めに終了して助かりました。

以前お話ししたルアノ地区の住民が建設した藁葺きのシェルターが雨期になると使えそうになく、またカルテの保管をするためには、鍵のかかるドアが必要です。そのためトタン屋根や窓枠、グリルドアなどをこちらから提供して、雨期の始まる前までに建設を終了してもらうことにしました。カルテの数が1500冊を超えたので、診察した分だけをルサカに持ち帰り、残りはそのシェルターに保管してもらう予定です。

コミュニティメンバーの収入創出活動として、3ヶ月間、ルサカでパンを購入し、それをルアノで売って、その差額をコミュニティの活動に充ててもらう計画でした。しかし、戻ってきたお金は1回分の40,000クワチャ(約800円)だけでした。始めは、現金を持っていないから、メイズなどの物品で支払われるなどと言っていましたが、結局その物品さえも戻ってきませんでした。これまで電池、クロリン、ブーム(洗剤)など彼らの要請に応じていろいろやってきましたが、うまくいっていません。むずかしいです。

今日は早めに診察が終わり、15時半過ぎにはルアノを後にしました。若い青年が人々に暴力をふるい、やっと捕まえて縄で縛ってあるので、チペンビの警察まで連れて行ってくれと依頼がありましたが、お断りしました。また、あるお母さん(患者ではありません)が明日チペンビヘルスセンターに行かなくては行けないので、同乗させてくれと言ってきました。ランドクルーザーは運転手も含めてすでに5人乗っていて満杯です。断っても子供を抱いて乗ってくるので仕方なく、チペンビまでぎゅうぎゅう詰め状態で戻りました。

以上

今後ともご支援のほどよろしく申し上げます。

